

幼児の音楽的行動に関する調査研究

伊藤 勝 志

北海道教育大学

1 はじめに

幼稚園教育は子どもの全面的な発達を促すことを目的としており、発達を目指されるべき特性の中には当然音楽的能力も含まれている。この音楽的能力が幼稚園という環境の中でどのように発達を促されているか、そして、保育指導上の課題は何なのかを探るため、子どもの音楽的行動の実態を把握してみようと思いついた。

子どもの自発的活動を保育の基本にしている本学の附属幼稚園においては、音楽的な活動もまた園児の自発性に委ねられている。したがって、子ども達が音楽と関わりのある活動を選ぶか否かは全て、彼等自身の興味・関心の在り方次第である。将来への音楽的発達を念頭にした指導がどのようになされるかは、一重に教師の技術と音楽に対する考え方に負うところが大きい。本来的に子どもの身に着いていくべきものが、教師の都合によって無視されてはならない。ここでは、幼稚園児の音楽的発達を助長する方法を探るための視点の一つとして、音楽あるいは音に関係した子ども達の行動を考えてみたい。

2 研究の目的

幼稚園教育は環境を通して行われるというのが一般的である。これは、子どもの自発的な発達エネルギーの燃焼を、余計な手助けで邪魔することなく促進させようとの配慮なのである。しかし、発達は学習によって進む部分も多く、その意味では正に細心の注意を払って適切な刺激、「適当な環境を準備」することこそ、保育の基本的課題であろう。音楽的能力の発達には特に、環境的要因が大きく関与していることは指摘されているところであり、子ども達が生涯にわたって音楽できるような特性を、身につけて欲しいとする立場からは、幼稚園における環境の在り方を是非明確にしたいところなのである。したがって本稿では、現在の幼稚園教育における環境の意味を確かめ、幼稚園児の音楽的行動の実態を大まかではあるが把握し、今後の保育指導の在り方を探る為の基礎的資料としたいのである。

「音楽的行動」は「歌をうたう」「楽器を鳴らす」「他の演奏を聴く」「創作する」「曲のリズムに合わせて身体を動かす」等、いくつか考えられるが、「音楽以前」と言われる幼児が対象でもあり、ここでは旋律やリズムを伴った表現あるいは表出、刺激音に対して明らかに耳を傾けていると思われる行動を全て「音楽的行動」と

捉えた。なお、音楽的行動に関する幾つかの先行報告より、松島(1992)、藤田(1992)、長沢(1993)を参考に分類整理した。

3 方法

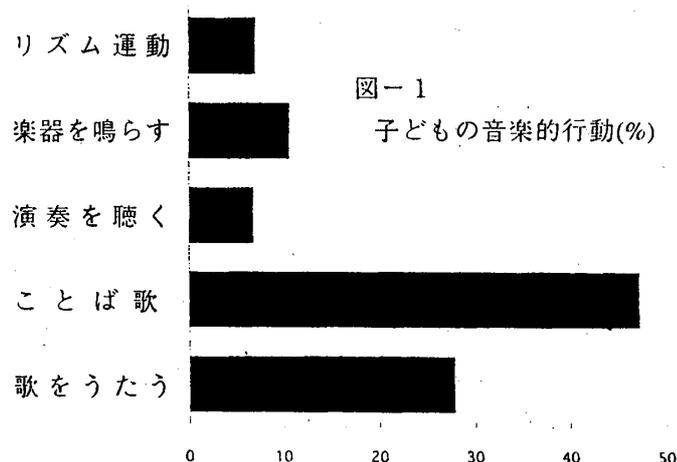
ビデオによる観察法を採った。対象児は北海道教育大学附属幼稚園3歳児20名、4歳児、5歳児各35名の各クラス。期間は平成7年12月8日から平成8年2月9日まで、冬期休暇を挟んでの2ヵ月間、1週3回の割合で計15回、9時30分から10時までの30分間である。遊び場面を録画し、後にこれを再生することによって音楽的行動を抽出した。遊びの種類、一つの遊びの観察時間、観察場所等は不同である。

4 結果

観察期間中に見い出された音楽的行動の総数は419であった。観察時期や時間帯、観察の場所や遊びの種類等々によって、子どもの音楽的行動の現われ方は多様であるが、おおまかな観察によって得られた結果として、気付いた点をいくつか整理してみる。

イ、全体的な特徴

図-1は、5つのパターンに分類した音楽的行動のそれぞれについて、頻度を百分率で示したものである。



幼児期の子ども達は、歌をうたうエネルギーがあふれていると言われる。図にも示されている通り、「歌をうたう」と「ことば歌」が多いことから、このことは明らかである。しかし、歌といってもそれは子ども達のレパートリーに入っている出来合いの歌ではない。そのような歌はあったとしても極めて数が少なく、しかもそれが完全な形で、つまり最初から最後までうたわれること

は通常の遊びの中にはほとんど現われず、CDを聴きながら一緒にうたわれた例のみであった。歌の中で最も多いのは、例えば絵を描いている時、オレンジ色のクレヨンを探しつ

つ「オレンジない？ オレンジない？」と旋律を付しておしゃべりするような、子ども達が毎日の生活の中で発声するこ

とばに、気分の高揚に応じた豊かな抑揚がついて生じた「ことば歌」のである。

楽器に関して最も多いのはピアノである。子ども達の眼前にいつもピアノがあり、いつでも蓋が開いているため、弾ける子も弾けない子も触ることができるようになってい

る故であろう。ピアノ以外の楽器を鳴らしたのは、実験的に保育室に木琴をセットした時だけであった。

子どもは音を出して遊ぶことが嫌いな訳ではなく、ブランコの支柱や空き缶を叩いたり、絵を描いている時の一瞬の休みにでも、リズムカルに机を叩いて音を出したり、床、テーブル、遊具など、とにかく音の出るものなら何でも叩いて遊ぶこともあるのは事実である。

他の演奏を聴くだけの行動は少なかった。じっと聴いているよりは自分も一緒に活動する方が、幼児にとっては得意な活動のようである。聴く行動が少ないのはそのような理由によるものであろう。今回観察されたのは、CDプレーヤーを操作しながらテレビの人気番組の歌を

大勢で聴いていた場合と、自分の出番を待ちながら友達のピアノを聴いていた場合のみであった。

幼児の音楽的行動にはこのように、音声を用いた旋律的表現の多いことが今回の調査では確認された。

ロ、集団的特徴

5歳女児が数人ごっこ遊びをしている中で、ハンバーガーを買いに行こうと言うことになった。歩きながら「ハンバーガー」を繰り返し唱えていたが、それがいつの間にか「ロッセリア」に変わった。これに仲間が三人、四人と加わり、声を揃えて園内を歩き回っていた。5歳男児、かくれんぼで「もーいいかい」「まーだだよ」がしばらく続いていたが、見つけられた子ども達が増えて来ると、本来の遊びを一時中断し、このことばをお互いに唱え、笑い合っている場面も観察された。リズムカルなことばを繰り返している間に仲間がそれに唱和し、やがて大きなうねりようになって行くのである。ハ、幼児であれば誰でも、いつでもうたうことを好むとは限らない。頻繁にうたう子や音を出して遊んでいる子、体をリズムカルに動かしている子など様々な場面が観察された。A君は、興味のあるものを見つけると直、話すことばに旋律をつけ、歩き周りながらいつまでも唱えている。B君はクリスマスも近いある日、リース用に画用紙で丸い芯を作っていた。切り抜いたものが冠のように見えたのか、それを頭に載せて「ハメハメハー」とうたいだした。一方、こちらからいくら誘いかけ、働きかけても決してうたわない子どもがいることも事実である。幼稚園も含め、どのような日常生活を過ごしてきたのかが大きく関わりあるのかも知れない。

二、環境の在り方について

子どもの音楽的行動の現われ方が環境によって左右されることは既に知られている。幼稚園においても、発表会などの前後には雰囲気盛り上がり、練習中の歌や踊などが現われることは日常的な事実である。

◎保育室の中に三台の木琴を並べておく。登園してきた幼児はこれを見つけると早速音を出す。これを聞きつけた年少児がやって来て、チューリップの探り弾きを始める。苦勞しながらも弾き終わるともう一度最初からやり直す。6分間、集中してこの活動を繰り返していた。

◎幼児が自由に操作できるCDプレーヤーと、子ども達に人気のあるアニメ番組のCD曲集を用意しておく。一遊びしてきた子ども達が集まってプレーヤーをいじり始める。歌を聴きながらおしゃべりし、リズムに合わせて身体が動き、彼等が知っている歌になると数人が声を揃えてうたい出だす。これらの音楽的行動も、準備がなければ日常生活の中ではなかなか現われない活動である。

図-2 子どもの歌

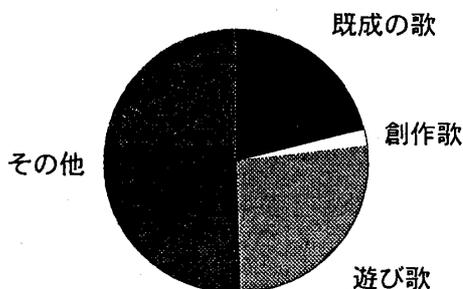


図-3 ことば歌

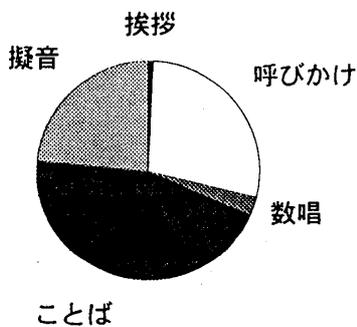


図-4 楽器を鳴らす

